

別子銅山で繋がる、東予のお話。

283年にわたって続いた別子銅山の歴史には、言葉では表現しきれないほどの物語があります。

その物語は、いつの間にかひとつの文化となり、今も人びとの日常や非日常の中に、生きつづけています。

このことを、目に見える形として今に伝えるのは、旧別子、東平、立川・端出場、上原・山根、星越、口屋・惣開の6つのエリアでこれからご紹介する「別子銅山産業遺産群」です。

新居浜市には別子銅山の施設や拠点があり、山から街、そして海まで南北40kmにわたり点在し、大切に残されているので、地域全体をミュージアムのように感じることができます。

その前に、別子銅山を中心として東予地方が繋がっていることを、少しだけお話します。

各市町と別子銅山の繋がり

西条市

- 西條藩領：別子銅山と合併する立川銅山は、西條藩領にあった。
- 炭の道：銅を製錬する際に必要な燃料（木炭）を運搬したルート。

四国中央市

- 宇摩郡天満浦：銅山開坑時の積出港は、現在の四国中央市土居町天満浦の港。
- 川之江代官所：別子一帯の天領は、川之江の代官が治めていた。

今治市

- 大山祇神社：別子銅山鎮守の神として「大山祇神社」が勧請されていた。
- 四阪島：煙害解決策として無人島に製錬所を移転。さらに拡大した煙害を世界ではじめて完全解決した島。
- 小大下島：製錬時に溶剤として使う石灰石を四阪島へ運搬。

上島町

- 弓削島：製錬時に溶剤として使う石灰石を四阪島へ運搬。

新居浜市
別子銅山



すべてはここからはじまった

神聖な地「旧別子エリア」

別子銅山発祥の地。元禄4年(1691)の開坑から、東平に採鉱本部が移るまでの中心地。かつては、約1万人の人々が暮らしており、県下でも上位を占める人口であった。発見した人々が大喜びしたことから名付けられた、坑口「歓喜坑」や、最先端の暮らしや繁栄を伝える接待館煉瓦塀や劇場跡など、鉱山施設と明治時代を感じられる世界が、美しく蘇った緑の中に、ひっそりと広がっています。

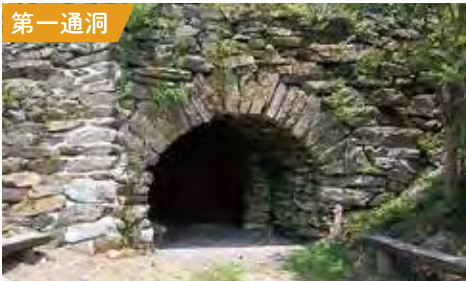
アクセス目安:新居浜ICより車で約90分

歓喜坑



別子銅山の記念すべき最初の坑口。住友家経営の備中吉岡銅山支配人 田向重右衛門一行が調査し、元禄4年(1691)開坑した。平成13年(2001)に当時の姿に復元された。

第一通洞



別子銅山最初の通洞(トンネル)。明治15年(1882)に着手し、広瀬幸平指導のもと、ダイナマイトを駆使しわずか4年で完成させた。標高約1,100m地点の水平坑道で全長は1,021mにもなる。

小足谷劇場跡



明治22年(1889)建設の巨大な建物。劇場は廻り舞台も完備され、収容人数は1,000人以上。京都や大阪から歌舞伎一座が来演して賑わった。劇場へと繋がる大きな石段が残っている。

小足谷接待館跡



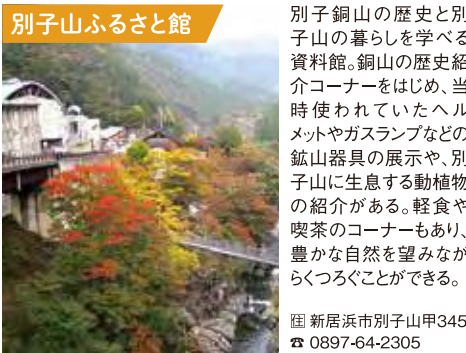
明治20年代になると小足谷が鉱山町として発展し、別子銅山を訪れる要人や賓客用に、宿泊のための接待館が建設された。現在は、厚重な赤レンガ塀が残っている。

蘭塔場



元禄7年(1694)別子大火災が発生し132人が殉職した。犠牲者を弔うため旧別子一帯が望める小高い岩山の上に観音堂が建てられた。明治になって歓喜坑下にあった手代の墓碑がここに上げられ、旧別子撤退とともに瑞応寺墓地に下ろされた。お盆には会社関係者による法要が今も行われている。

別子山ふるさと館



別子銅山の歴史と別子山の暮らしを学べる資料館。銅山の歴史紹介コーナーをはじめ、当時使われていたヘルメットやガスランプなどの鉱山器具の展示や、別子山に生息する動植物の紹介がある。軽食や喫茶のコーナーもあり、豊かな自然を望みながらくつろぐことができる。

〒新居浜市別子山甲345
☎ 0897-64-2305

東洋のマチュピチュと呼ばれる

天空のまち「東平エリア」

標高750mに位置し、大正5年(1916)から昭和5年(1930)まで採鉱本部が置かれたエリア。貯鉱庫・選鉱場・索道基地・インクライン・変電所のほか、学校・娯楽場・接待館など、当時を伝える多数の産業遺産が残っています。平成6年(1994)には、「マイントピア別子 東平ゾーン」として歴史資料館も整備され、人気のスポットとなっています。

アクセス目安:新居浜ICより車で約60分

東平貯鉱庫跡・選鉱場跡・索道基地跡



坑道から運び出された鉱石は、貯鉱庫に下ろし選鉱され、索道で端出場エリアに運搬。当時の姿のままの貯鉱庫は「マチュピチュ」の遺跡を彷彿とさせ、神秘的な空間を創っている。

第三通洞



明治27年(1894)着工、明治35年(1902)に1,820m貫通。その後、東平～日浦間約4,000mが結ばれた。昭和13年(1938)には、かご電車の運転も始まり、新居浜側と別子山側を結ぶ交通機関として、住民にも親しまれた。

小マンプ・かご電車



当時のままの、かごに乗れるよ!

明治36年(1903)、第三通洞から貯鉱庫まで2つのトンネルが完成。そのうちのひとつが「小マンプ」。現在トンネル内には、時速約8km定員8名で運行されていた「かご電車」が展示され、当時の面影を今に伝えている。

旧第三変電所



明治37年(1904)建設、赤レンガ造りの変電施設。落シ水力発電所の電気を配電した。明治40年(1907)焼失したが明治42年(1909)再建され、昭和43年(1968)まで鉱業用・社宅用の電力を供給した。

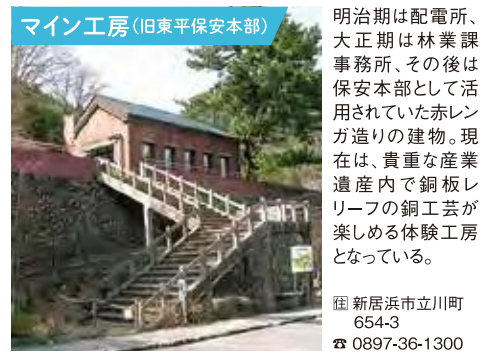
東平歴史資料館



採鉱本部が置かれた東平エリアの生活史を、当時の写真や再現ジオラマで伝える資料館。銅や生活物資を背負って山と海を行き来した人々「仲持(なかもち)さん」の荷物の重さ体験もできる。

〒新居浜市立川町 654-3
☎ 0897-36-1300

マイン工房(旧東平保安本部)



明治期は配電所、大正期は林業課事務所、その後は保安本部として活用されていた赤レンガ造りの建物。現在は、貴重な産業遺産内で銅板レリーフの銅工芸が楽しめる体験工房となっている。

〒新居浜市立川町 654-3
☎ 0897-36-1300

中継所としての要！

山から街へ「立川・端出場エリア」

立川は、銅山物資輸送の中継地として栄えました。明治26年(1893)別子鉱山鉄道下部線の始発駅となった端出場は、昭和5年(1930)採鉱本部が東平から移転し、閉山するまでの最後の採鉱拠点。平成3年(1991)には、別子銅山の歴史について遊びながら学べる観光施設「マイントピア別子 端出場ゾーン」がオープンし、街と山の間地点として、賑わっています。

アクセス目安：新居浜ICより車で約30分

旧端出場水力発電所 国登録有形文化財



安全な公開に向け、準備中！

明治45年(1912)建設。当時東洋一、597mの落差を利用し最大級の出力4,800kwを誇った本格的電力供給施設で、ドイツ・シーメンス社製発電機やフォイト社製水車等、100年前の貴重な機器が残っている。 ※内部非公開

第四通洞・四通橋



大正4年(1915)大立坑までの4,596mを貫通し、運搬の大動脈となった。1組20人1日4交替で作業に当たり、5年8ヶ月で完成させた。橋は、大正8年(1919)に第四通洞接続のトラス橋として開通。

旧泉寿亭特別室棟 国登録有形文化財



昭和12年(1937)別子銅山開坑250年記念の来客を迎えるため、住友企業によって建てられた接待館。「泉寿亭」は、住友の屋号「泉屋」を寿ぐ館の意。現別子銅山記念図書館の地から、平成3年(1991)に特別室の一室が移築された。

遠登志橋 国登録有形文化財



明治38年(1905)長さ48.26m、幅2.4m、高さ23.2mで完成。ドイツのブルバハ社製の鋼材で組まれた日本最古級のアーチ橋。東平エリアへの生活道路として利用され、坑水路も併設されていた。

マイントピア別子



新居浜を代表する観光施設。昭和5年(1930)から採鉱本部がおかれた拠点地跡。約6万㎡の広大な敷地には、別子銅山の歴史を遊びながら学べる鉱山鉄道・観光坑道や、ゆったりと楽しめる温泉施設・レストランがある。

国 新居浜市立川町707-3 ☎ 0897-43-1801

端出場鉄橋 国登録有形文化財



明治26年(1893)別子鉱山鉄道下部線開通時に完成した。美しいボーストリングワーレントラスト(弓弦式)の橋。鉄橋の部材はドイツのハーコート社で作られ輸入されたもので、現在国内に数基しかない。今でも、マイントピア別子の観光用鉱山鉄道として利用されている。

先人・偉人の想い

次代に繋ぐ「上原・山根エリア」

山間部と平野部を繋ぐ高台に位置し、銅山で働く人々や偉人たちの物語が数多く残るエリア。上原には、初代住友総理人「広瀬幸平」の旧広瀬邸や記念館が、山根には、かつての製錬所煙突や、記念館があります。収銅所では現在もなお環境に配慮した鉱水処理を続けており、地域・日本・世界の次代を創った当時の人々の想いを受け継ぎ、繋げています。

アクセス目安：新居浜ICより車で約20～30分

旧広瀬邸 国重要文化財



初代住友総理人 広瀬幸平の邸宅。明治の大規模和風住宅で、美しい庭や茶室の他、ガラスや避雷針、暖炉等モダンな西洋輸入品もあしらっている。「望遠楼」と呼ぶ2階の部屋からは街や瀬戸内海を一望でき、広瀬氏が漢詩を詠み想いをはせたと言われる。

広瀬歴史記念館



広瀬幸平の足跡を通して、工業都市・新居浜の生い立ちと、日本産業近代化の歩みをたどる記念館。建物にそびえる特徴的な塔は「現代の望遠楼」と呼ばれ、潜望鏡の仕組みを利用し、南北に美しい山々と瀬戸内海を眺めることができる。

国 新居浜市上原2-10-42 ☎ 0897-40-6333(広瀬歴史記念館)

別子銅山記念館



貴重な資料を保存展示する記念館。毎年開坑許可日の5月9日正午には、天窓から「歓喜の陽光」と呼ばれる一筋の光が差し込むよう設計されている。さらに屋根には5月の花サツキが1万本咲き、歓喜の陽光と共に私達に熱い想いを伝えている。

国 新居浜市角野新田町3-13 ☎ 0897-41-2200

旧山根製錬所煙突 国登録有形文化財



明治21年(1888)製錬所が設置された。当時の先端技術で、銅製錬と共に硫酸製造や製鉄試験を行っていた。100年以上の時を超えた今でも高さ20mのレンガ煙突が残り、新居浜のシンボルとして「えんかつ山」の愛称で親しまれている。

大山積神社・別子1号機関車



開坑直後に、鉱山鎮護の神として大三島(現：今治市)の大山祇神社を祀った。当初は、旧別子の縁起の端に建てられたが、現在は山根地区に移っており、例大祭が行われている。その境内には、海拔約1,100mの山中5,532m間を走っていた日本初の山岳鉱山鉄道「別子1号機関車」が展示され、当時を静かに伝えている。

山根競技場観覧席(山根グラウンド) 国登録有形文化財



石積み観覧席は圧巻！

昭和2年(1927)住友別子銅山(株)常務取締役 鷲尾勤解の考えの下、住友各社の社員による「作務(さむ)」と呼ばれるボランティア活動により建設。400mのトラックと収容人数約6万人という規模で、当時は企業運動会に、現在は太鼓祭かき比べ会場として観客で埋め尽くされる。

暮らし働く「星越エリア」

大正14年(1925)に星越山の斜面に建設された「新居浜選鉱場」を中心に開発されたエリア。別子鉱山鉄道の星越駅舎が置かれ、当時理想とされた田園都市構想を実現した「職住分離」の幹部職員の社宅群が、国内でも早くに建設されました。この他道路整備はもちろん、病院、小学校、住友倶楽部、泉寿亭等も建設。当時の景観が残る「生きた昭和のまち」として、今なお風格を帯びてたたずんでいます。

アクセス目安：新居浜ICより車で約30分

旧新居浜選鉱場



別子銅山では鉱石を人の手で選別していたが低品位の鉱石からも、効率よく製錬するために、大正14年(1925)機械選鉱場として建設。星越エリアのシンボリック的存在だったが、現在は建屋を撤去している。

山田社宅群・西洋住宅



国内最後の社宅群と言われている。かつては、生垣に囲まれた平均100坪の戸建て住宅が連なっていた。昭和4年(1929)の建設当時、新居浜屈指の高級住宅街で、1,000人が暮らしていた。その中に、外国人技術者も快適に暮らせるよう、サンルームやテラスがついた2階建て西洋社宅2棟が今も残っている。

旧星越駅舎



新居浜選鉱場の操業に併せて設置された別子鉱山鉄道の駅舎。昭和4年(1929)には、鉱山鉄道が一般客も利用できる地方鉄道になり、星越駅で国鉄の切符も買うことができるなど地域の玄関口となった。近くにトンネルも現存している。

別子鉱山鉄道(下部鉄道)跡



下部鉄道は、端出場から惣開までの10,461mで、明治26年(1893)に開通。端出場からは銅鉱石などを、惣開からは生活用品などが運ばれていた。別子銅山の繁栄と、人びとの暮らしを支えた鉄道沿いの道のほとんどは、サイクリングロードとして整備され、現在人びとに愛され続けている。

世界への玄関「口屋・惣開エリア」

工都、新居浜の原点。銅山開坑時の窓口港は、宇摩郡天満浦(現:四国中央市土居町)でしたが、元禄15年(1702)に新居浜浦へ移り口屋が設けられました。口屋に運ばれた粗銅は大阪で精錬され、長崎出島からオランダ・中国へ輸出。口屋エリアは188年間にわたり銅山物資輸送の玄関口として栄え、多様な文化が入り交じる地域でした。人びとが創りあげてきた「新居浜のまち」の証が、今に繋がっています。

アクセス目安：新居浜ICより車で約30分

口屋跡・あかがねの松



港と登道に面し、入港船の積み荷検査、輸送業務を行う重要拠点だった口屋。その跡地は小学校、町役場、市役所、図書館等に使用され、現在は「口屋跡記念公民館」となっている。300年の時を超えて「あかがねの松」は、当時のまま今も同じ場所に、凛と根を下ろしている。

自彊舎跡



大正元年(1912)鉱山従業員の精神教育の場として、旧別子地区において、鷲尾勘解治が始めた私塾。時代と共に山から街へ移り、従業員だけではなく広く地域の人びとの力となった。現在の菊本町にある敷地跡は小公園と姿を変えたが、鷲尾の精神は、しっかりと新居浜で生き続けている。

共存・共栄・申孝橋



鷲尾は初代新居浜市長白石誓二郎らと共に、閉山後の「新居浜後栄策」に着手し都市計画を断行。鷲尾は企業と地域社会の「共存共栄」を願い、この理念に偽りはないとして昭和通りの3つの橋に「共存橋」「共栄橋」「申孝橋」と命名。自彊舎跡の小公園には「共存橋」と「共栄橋」の橋柱が残っている。

登道



「別子銅山に登っていく道」という意味で、明治22年(1889)に口屋が惣開に移転するまで、銅山〜口屋間の輸送メイン街道だった。街道沿いには、商店・映画館・飲食店・銀行が連なり賑わい、現在も「登道南商店街」「登り道サンロード」に足を運ぶと、当時の物語が伝わってくる。

昭和通り



昭和6年(1931)幅約11mの「昭和通り」が完成。中心街「本町通り」から商店が移転し、別子大丸をはじめデパート・ダンスホール・写真館・証券会社・スケート場・ボウリング場等通行できないほど賑わった。現在も「昭和通り商店街」で、代々続く老舗店に出会うことができる。

別子銅山記念図書館



平成4年(1992)別子開坑300年を記念して、住友グループから新居浜市へ寄贈された楕円形ドーム型の図書館。元々住友グループの宿泊施設であった泉寿亭の庭が美しい。書架には、住友家第16代当主が所蔵していた泉幸吉文庫や住友老社会文庫など、別子銅山関連書籍が充実している。

〒790-0110 新居浜市北新町10-1 ☎ 0897-32-1911